

冬になると思い出すのは、子供の頃に見たまっ白な雪をかぶった伊吹山の姿である。小学校時代に住んだ家の前の道は東西に走っている。西を向くと伊吹山の連山が目の前に広がり、その前に畑や田んぼが連なる。小学校は西南方向で、校門は家から直線で、約二百メートルの所にある。学校中の全生徒を見ても、学校から一番近い生徒は、私であった。六年間、毎日歩いて通った。小学校三年生で終戦を迎えた。

そんな中で、学校へ行く冬の道はいやだった。道路は、畑とあまり変わらず、石などは敷いていない。車は一日たっても、一台も通らない。一度雨や雪が降り、そこを人や自転車が通ると、道は柔らかく通った跡に凸凹ができる。昼間の気温くらいでは、冬の土は乾かない。朝になるまでに、水を含んだ土は、凸凹の形を保ったままで氷ってしまう。学校へ行くには、その凸凹の上をわら草履や下駄を履いて歩いて行く。足は右に左に傾きながら、足首をひねりながら、転ばないように歩く。西の方を見ると、まっ白な伊吹山が見える。

氷りついた土は、昼間の気温で溶けだす。学校からの帰りは、凸凹の形のまま溶けて、べとべとになった土の上を歩いてゆく。草履や下駄にくっついた土は、なかなかとれない。家の玄関の内まで、ついてくる。雨はあまり降らないが、こんな毎日が二カ月間くらい続く。さらに毎年、二、三回雪が降る。多くて、十センチくらい積る。雪には、わくわくする興奮を感じた。しかし、雪が溶けた後は、道がぬかるんで大変である。毎年、三月になると、土は氷らなくなり、べとべとの道から開放されて、ほっとする。

冬以外には、いい事がたくさんあった。学校へ行く途中には、田んぼに流れる小川がある。それは、家々から出る水が集ったものである。それでも水はきれいで、小川には鮒（ふな）や、どじょうが、たくさんいた。水が流れにくい所では、蚊の幼虫である、ぼうふらが泳いでいる。それを集めて鮒に与えると、喜んで食べる。

家の庭木には、いろいろな虫が飛んできた。梅雨の季節には、夜になると蛍がいくつも光りだす。夏休みに入ると、蟬の外にも、くわがた、がよく飛んできた。お盆が過ぎると、こおろぎの鳴き声が、家の中いっぱい広がる。

小学校時代の家は、都市計画の道路に掛かり、五十年くらい前に現在の家に移った。昔の家の前の道路と、現在の家の前の道路はほぼ平行であり、現在の家は千メートルくらい、東側にある。そのため、現在の家の前の道路からも、西を向くと冬には、雪の伊吹山が見える。しかし、山の前は家々がいっぱい、電柱や電線もいっぱい。昔の伊吹山は、その何分の一しか見えない。

それでも、見えているまっ白な伊吹山の片隅から、子供の時代を思い出す。